

# 中国語話者を対象とする漢語動詞の教育のための総合的研究

## —母語の働き方と母語知識の活用に着目して—

劉倩卿 LD182004

### 1. 研究動機

本研究は、中国語を母語とする日本語学習者（以下中国語話者）を対象に、漢語動詞を教える際に、母語の働き方を十分考慮した上で、母語の知識を適切に利用して効率的な対策を提言するためのものである。

日本語の漢語動詞は、中国語と形も意味も同じだが、品詞や自他が異なるものがあるため、中国語話者にとって習得が難しいとされている。五味ほか（2006）では、「低下する→\*低下になる」のような誤用が観察され、日中語の品詞性のズレによると述べている。庵（2010）では、「開通する→\*開通される」のような誤用が観察され、日中語の自他のズレによると述べている。しかし、いずれも中国語の特徴が十分に検討されていないため、中国語話者による使用実態とその要因が正確に把握されたとはいえない。

また、中国語話者向けの教科書を観察すると、漢語動詞の品詞や自他が揭示されているが、一々覚えきれず、品詞や自他がわかっても正しく使えるとは限らない。その結果、中国語の発想に沿って使うとか、独自の規則を作って使ってしまうことになる。如何に学習負担が少なく、効率的に教えるのか、中国語話者を対象とする漢語動詞の教育の課題である。

そこで、本研究では、中国語の視点から、中国語話者による漢語動詞の習得状況を再検討し、母語の働き方を明確にした上で、母語の知識を活用した教育試案の作成を目指したい。

### 2. 先行研究と研究目的

第2章では、まず、第二言語習得研究における母語の扱い方の変遷をレビューし、本研究の立場を述べた。次に、日本語の漢語動詞に関する研究を概観し、特に動詞の自他及び漢語動詞の自他に関する研究を紹介し、本研究で注目する対象を明らかにした。即ち、中国語話者が誤用しやすいとされている自動詞的表現であり、意味上では物事の変化を表すものである。さらに、漢語動詞の日中対照研究と習得研究を概観し、先行研究の問題点を指摘し、本研究の位置付けを明確にした。

従来の対照研究は、語レベルの分析や形式上の対応関係の提示にとどまり、文レベルの分析、形式化されない場合の意味上の分析、及び事象の捉え方といった側面からは、十分に検討されていない。そして、従来の習得研究では、中国語話者における誤用の現象が観察されたが、誤用の原因が従来の対照研究による品詞や自他のズレとされ、中国語への考察が十分にないため、実際に中国語がどのように働いているのかは明らかになっていない。

そこで、本研究は中国語の視点から、文レベルの特徴、意味分析、事象の捉え方といった観点も取り入れ、中国語の「変化」を表す表現の特徴を分析した上で、新たに対照分析を行うことで、問題の所在を特定したい。そのために、習得調査を実施し、対照分析の結果を検証し、その要因を解明していきたい。また、学習環境と学習レベルによる変化、日本母語話者の使用実態との比較を通して、より問題の所在を明確にするとともに、中国語話者の使用意識を考察することも本研究の特色である。最後に、対照分析と習得調査で解明した問題の所在と要因に基づき、母語の知識を活かして効率的な指導対策の作成を目指したい。

具体的には、次の3課題を設定し、研究を進めていく。

課題1：中国語の視点から、どのような語を、「漢語+になる」や「漢語+される」と使いやすいのか。その中で、どのような語が誤用しやすいのか。

課題2：課題1で特定した語は、実際に中国語話者がどのように使うのか、なぜそのように使うのか。

課題3：中国語話者を対象とする漢語動詞の教育では、何をどのように教えるべきか。

### 3. 研究方法

第3章では、本研究のアプローチを提示した。つまり、以上のような研究課題に基づき、本研究では、①教育のための対照分析、②対照分析の検証と補充のための習得調査、③母語知識に基づいた教育試案の作成、という3つのステップに分けて進めていくことにする。

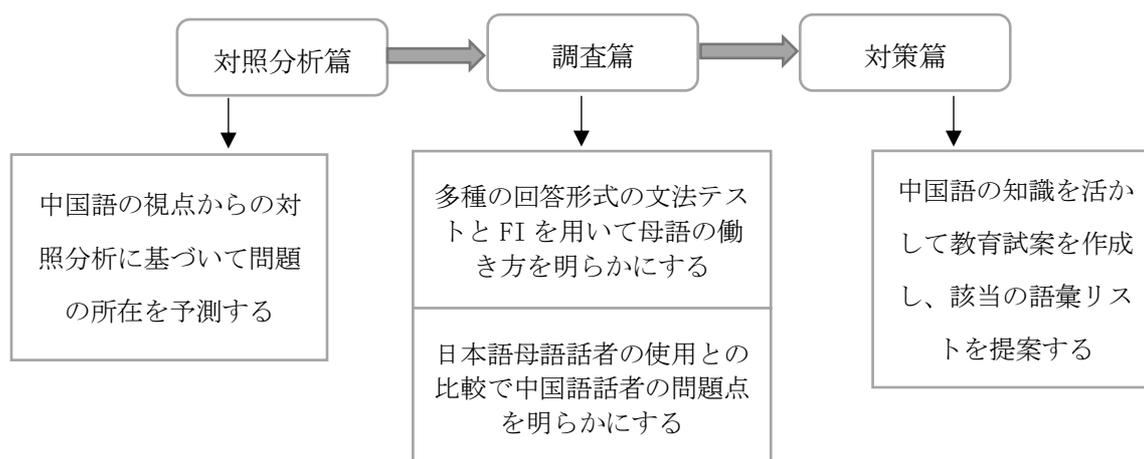


図3-1 本研究のアプローチ

#### 4. 研究結果

##### <対照分析篇>

本研究では、中国語話者の視点から漢語動詞を見直し、両言語の品詞や自他のずれに限らず、意味的な特徴及び事象の捉え方も取り入れて分析した。その結果、中国語話者における習得上の問題点が絞られた。まず、第4章では対照手法を提示し、第5章では中国語では「変化」を表す語の構文的・意味的な特徴を分析し、非変化形容詞、主体変化形容詞、主体変化動詞、客体変化形容詞、客体変化動詞という5つの種類に分けた。次に、第6章では、中国語の「変化」を表す語に基づき、日本語の二字漢語語彙（JLPT1級～4級）の中から、該当する語を抽出した。両者の対応関係は、表13-1の通りになる。

表 13-1 中国語の「変化」を表す語と日本語の二字漢語の対応関係

中国語	日本語
非変化形容詞	ナ形容詞
主体変化形容詞・動詞	サ変動詞 (自動詞、自他両用)
客体変化形容詞・動詞	サ変動詞 (他動詞)

以上のような対照分析の結果に基づき、第7章では、中国語話者における問題の所在を予測した。中国語話者にとって誤用しやすいのは、表13-1におけるサ変動詞（自動詞、自他両用）の部分であると絞られた。つまり、日本語では、デフォルト的に「する」を使う場合、中国語では用法が分けられているため、中国語話者が母語の論理に沿って考えて使うと予測した。具体的には、(1)の通りである。

(1)	日本語	中国語	誤用の予測
	サ変動詞	{ 非変化形容詞 主体変化形容詞・動詞 客体変化形容詞・動詞	→ 「になる」
	(自、自他)		→ 「になる」
	「する」		→ 「になる」・「される」

##### <調査篇>

中国語話者による漢語動詞の使用実態とその要因を明らかにするため、調査を行った。第

8章では調査の目的と調査の方法を説明した。調査の構成は、表 8-1 の通りである。まず、母語の働き方を把握するために質的な調査を行った。それから、さらに問題の所在と要因を解明するために量的な調査を行った。

表 8-1 調査の構成

	調査対象	調査方法
質的調査	中国語話者（上級）	文法テスト+FI
量的調査	中国語話者（JFL-上級）	自然さ判断テスト+FI
	中国語話者（JSL-上級）	
	中国語話者（超級）	
	日本語母語話者	

第 9 章では調査の結果を分析し、第 10 章では総合的な考察をした。その結果、以下の 3 点が明らかになった。

まず、全体的な使用実態から、中国語の用法によって使用傾向が異なるため、中国語の影響があるということがわかった。つまり、非変化形容詞、主体変化形容詞・動詞は「になる」と「する」を使いやすい、客体変化形容詞・動詞は、「になる」や「される」を使いやすいという傾向が見られた。

(2) 「本研究における習得状況」

非変化形容詞、主体変化形容詞・動詞： \* 「になる」 + # 「する」

客体変化形容詞・動詞： \* 「になる」 + \* 「される」

次に、その要因は、FI の結果によると、中国語話者は中国語の用法を意識しながら漢語動詞を使用するのではなく、事象の捉え方が主な判断基準であるということがわかった。つまり、「変化」を感じると「になる」を使い、「働きかけや影響」を感じると「される」を使い、「変化なし」、即ち単純状態や人の感情・動作を感じると「する」を使うというのである。このような事象の捉え方にに基づき、母語が潜在的な知識として働いており、既習の日本語の規則に対する拡大解釈という要因と相互に作用した結果であることが示唆された。

さらに、中国語環境（JFL）と日本語環境（JSL）の比較、上級学習者と超級学習者の比較によって、正用と誤用が共存している様相が観察され、日本語に触れる機会が多くなり、日本語レベルが上達するにつれて、正用の「する」が定着し、誤用の「になる」と「される」が削除されていく過程が判明した。ただし、超級に至っても、誤用が消滅しにくい傾向が見られ

た。超級学習者と日本語母語話者の使用実態を比較した結果、日本語母語話者の方が「する」を使いやすいのに対して、超級学習者は「する」を使う一方、「になる」と「される」も認めるとい違いがわかった。中国語話者にとって「する」の習得が難しく、教育上のポイントであると示唆された。

#### <対策篇>

以上の対照分析と調査の結果に基づき、中国語話者を対象とする漢語動詞の教育試案を作成した。第11章では、現行の教科書と指導方法の問題点を指摘した上で、第12章では、教育の試案を記述した。具体的には、母語の知識を利用して、学習負担を最小限にし、段階をおって導入する指導案を提案した。まず、中級の前半（2年前期）に、「変化」の表現に関する基本内容を導入する。次に、中級の後半（2年後期）に、漢語動詞の体系的なまとめ、母語に基づいた使いやすい規則、該当する語彙リストを提示する。具体的には、対照分析の結果に基づき、(3)のような規則を提案した。最後に、上級（3年）では、表現の精密化と言語理論的な内容の説明を工夫することで、日本語に対するより深い理解、専門的な文章を読むこと、書くことに役に立つと考えられる。

(3) ① “了” と “没” で言える

→ 「になる」を使わないと教える。

※例外の少数の語は、明示的に教える。

② [NP1+V+NP2] で言える

→ a. 「される」が使える語（他動詞）をリストアップして教える。

→ b. a以外の場合、すべて「する」を使うと教える。

#### <展望篇>

第13章では、結論をまとめ、本研究の意義と今後の課題を提示した。今後は、漢語動詞の使用に関わる他の側面の考察、言語分析の精密化と深化、教育試案の効果の検証と改善を目指して、さらに研究を進めていきたい。

#### 引用文献

庵功雄（2010）「中国語話者の漢語サ変動詞の習得に関わる一要因—非対格自動詞の場合を中心に—」『日本語教育』146, 174-181.

五味政信・今村和宏・石黒圭（2006）「日中語の品詞のズレ：二字漢語の動詞性をめぐって」『一橋大学留学生センター紀要』9, 3-13.